明日への扉
Door to Tomorrow

「手筋絞」の第一人者を目指して、技を磨く。

有松・鳴海絞 括(くく)り職人

大須賀 彩 氏

旧東海道沿いの町、名古屋市緑区有松。今なお江戸時代の建造物を数多く残し、あたかも時代をさかのぼったかのようなこの地に、四百年以上続く伝統工芸がある。それは有松・鳴海絞だ。花や蜘蛛の巣のような柄など、多彩な模様を風合いのあるシワで生み出すその技法は、百種類にも及ぶ。

大須賀彩さんは、染色を学んだ大学時代に有松・鳴海絞と出会い、大学院生のときに職人の道に入った。現在は、主に女性服を手掛ける山上商店のアトリエ兼ショップで技術を磨いている。

Aya Osuka

1986年愛知県生まれ。大学の授業で有松・鳴海絞を知り、有松で実物を見てこの世界へ。修業と並行して大学院で染色をより深く学び、括りも染めもできる職人となる。

有松・鳴海絞(ありまつ・なるみしぼり)

名古屋市の有松・鳴海地域を中心に生産される絞染めの総称。江戸時代初期、名古屋城築城の際に、九州から来た人々から絞染めを知り、新しい技法を考案。旅人の土産として絞の手ぬぐいや浴衣などを売ったことがルーツとされる。

絞とは？

大須賀「布に圧力を掛けて染料が染み込まないようにし、模様をつくるのが絞です。圧力の掛け方は、糸で縫う、板で挟む、糸などで括る、という三つの方法があります」

糸で括る絞の中で縦の筋を生み出す「手筋絞」は、布を蛇腹のように折って筋を付けた後、綿の糸を切らないように絶妙な力加減で均等に巻き付けていく。このとき、糸の巻き具合が弱いと、思い描いた模様には染まらない。布を染める際、括った部分にまで染料が浸透してしまうからだ。

「手筋絞」にとどまらず、より難度の高いものを含め、これまでにさまざまな技法を習得してきた。また、括り職人という枠にとらわれることなく、大学・大学院で学んだ染色の専門知識を生かし、染めも自らの手で行い、模様の表現にこだわる。

今後の抱負は？

大須賀「伝統工芸士になることをはじめ、夢や目標はいくつもありますが、究極的には『手筋絞』といえば『大須賀彩』といわれるくらいの存在になりたいですね」

いつの日か、「手筋絞」の第一人者といわれる日を目指し、若き職人はただひたすらに、括りと染めに挑み続ける。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2017年6月取材。掲載内容は取材当時のものです。

映像ドキュメンタリー
「明日への扉」を
ぜひご覧ください。
WebやTVなどで
お楽しみいただけます。

Web版　パソコンやタブレットでもご覧になれます。
今回ご紹介した方を含め、他にも多数の若者たちをご紹介しています。
アットホーム明日への扉　検索

SNS配信　Facebook https://www.facebook.com/AthomeTobira
Twitter https://twitter.com/AthomeTobira

TV番組　ディスカバリーチャンネル(CS)
冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン　ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

Discovery CHANNEL

最新号のご案内
好評公開中
No.102
京表具 表具師
後藤 悠斗 氏
(京都府)